

キーンコーンカーンコーン。

終業のチャイムが鳴り、歓喜にも悲哀にも取れる歓声が講義室を埋め尽くす。講義最終日、最後のコマ。その講義が終りを告げ、拘束されていた学生たちを解放する。

「あゝあ、やっと終わったかあ」

オレ、井ノ原雄二もそんな一人であった。大学生活も二年目。慣れてきたとは言え、やっぱりメンドくさいモノはメンドくさい。こればかりはどうしようも無い。まあそのメンドくさいモノが全部終わったからもういいんだけど。とりあえず終わったものはどうしようも無い。結果がどうなっても気にしない。それがオレの1年間で学んだことだった。だってどうしようも無いもんね。結果はもう出ちゃってるんだもんね。そんなモノを心配して楽しめないとか人生損してるもんね。よし、それじゃこれから――

「ゆ〜っじ、テストどうだった？」

「……なんだ、佳奈か」

柗佳奈。小学校からの腐れ縁で、大学、さらには学部まで一緒になってしまった。もう十三年も一緒に居たから幼なじみと言うのを通り越して兄妹みたいなものになってしまった。いっつも一緒にいるからもう慣れちゃったけど。

「で、今日どうするの？ この後」

「どうするって、決まってるだろ？」

「そ、そうよね、一緒に……」

「テスト前に予約してた美少女ゲーム回収に行くに決まってるだろ！」

せっかくのテスト明け。今まで我慢してきたゲームでもやらないと。それに、今日まで心待ちにしていたんだ、あの期待の新作、『アイプラス』を。この日のために夜の勤のバイトもしたし、一ヶ月一万円での節約生活もした。ここまですて頑張ってきたんだし、テストも終わったんだから……もう、ゴールしても……いいよね……？

「っつーワケだから、ちよっくら行ってくる！」

「あ、ちよ、ちよと雄二？」

「ちよっと荷物持っていって来てくれ！ オレすぐ帰

ってくるから!」

「あ、行っちゃった…… テスト終わったら一緒に買物行こうって言ってたのに…… バカ」

秋葉原。ヲタたちの欲望や妄想と言ったものがうごめく街。そんな街に立っていた。久々のアキバ。ほんの1ヶ月ぐらい来なかったただけけど、色々変わったーのかなあ? なにげに前あったお店とかがなくなったりしてるし、この紳士服売ってる店なんか前工事中だったよな……。本当にアキバはどうなってるんだろな。――そんな事よりゲーム買いに行かなくちゃ。予約はしたけど確か特典は回収順だから早く行かないと無くなっちゃうんだよなあ。これだからねこのあなで予約するのは嫌なんだよなあ――。

中央通りから一本入った路地。最近は色々な店が入ってきて路地の方が落ち着く。アキバ特有の、なんとなくアーダーグラウンドな感じ。今の明るくなってしまったアキバにはないこの感じが好きだった。

……ん?

いつもと違う感覚。この角のところ、ビルなんてあったっけ。そのビルには『ワープホール』という看板。――美少女ゲームの店なのか。見たことないけどなあ。まあいいや入ってみよ。

「いらっしゃい」

ちょっと薄暗い店内に、ちょっと大きめのオッサンがレジ前に座っていた。店長なのかな?

他の店員さんが居ない。……何だ、この店。美少女ゲームはたくさんおいてあるけど、どのタイトルも見たことが無い……。いや、違う。この店、他のどの店にもおいてないようなマニアックなゲームが揃ってる。あの販売中止になったソフトも、百本しか作ってないって言われるそのソフトも入ってる。この店、「体……」

「君、この店は初めてかい?」

ビクッと肩を締め、その声のする方向を向く。さっき座

ってた店主が笑いながらこっちをみる。

「何か面白そうなのあったか？ ウチは品揃えだけはあるからなあハッハッハッ！」

「は、はあ……」  
テンションたけえなあ、オッサン。

『——様……』

ん？ なんだろう。誰かに呼ばれたかな？ 「おお、

『最果ての空』に興味があるのか？」

呼ばれた気がして振り向いた先。そこには一本のゲーム、『最果ての空』があった。見たことも無いソフト。ゲームを買時は事前調査を欠かさないのだが、このゲームには何か、惹きつけるものがあるように思えた。

「な〜んで買ったんだろ、これ」

手元にはあの店で買った『最果ての空』。

アイプラスも買ったが、最果ての空が頭から離れなかった。このゲームを手にする事を前からわかっていたかの

ように。

「う〜ん、まあやってみるか〜」

ディスクが回る心地よい音がある。まもなくソフトが起動する。テンション上がるよね、この瞬間。「はじめから」をおすこの瞬間。

『雄二様、私、日向かなたは、あなたのことが……好きです！』

へえ、主人公の名前、雄二って言うのか。オレとおんなじ名前かあ。なんか嬉しいような恥ずかしいような変な感じだな。この前、誠ってやつが名前被ったって言ってたけどそいつはなんか複雑な顔してたし、同じ感じかな。

『ちょっと、雄二様？』

なかなか進まないのな。というかバグか？ クリックしても進まないと言うか、全然セリフが出てこない。

『雄二様、聞いてるんですか？』

主人公が寝ている状況なのかな。早く進んでもらわないと消化出来ないじゃないか。積みゲーも大量にあるから早く進めたいんだけどなあ。

『……雄二様？』

なんでこうも出てこないんだ主人公。さすがにおかしくないか？ ここまで主人公が出てこないとか、もう物語が始まる気がしないじゃないか。

「おいおい大丈夫かよこれ……」

『ゆ、雄二様？ その声は雄二様ですか？』

——はい？

突然ヘッドホンから流れてくる声。今まで聞いていたの

とは何か毛色が違う声。そんなものがこのヘッドホンから聞こえてくるはずが——。

『雄二様！ 雄二様なんですわね！ ああ、声を聞けてよかった！』

画面には正面を向いている笑顔の少女。それ以外にはキヤラは映っていない。もしかして、自分の声に反応しているのか？

「いやいや、そんなはずが——」

『雄二様、何を言ってるんですか？』

反応してる？ なんで？ 人工知能？ そんな新しい技術をエロゲなんかに使ってもいいの？ というかなんでオレの名前知ってたんだよ！

「え、えっと、これは「体……」

『もう、雄二様ったら、照れちゃって話しかけれないのかなあ？』

これはどういう状況なんだ。明らかにオレの言葉に反応してる。ヘッドホンに付いたインカム。これで声を拾っ

てるんだろうか。でも、リアルだよな……。こんな

「人工知能じゃ無理だよなあ……」

『もう、私、人工知能なんかじゃないですよ！ 私には「あなた」っていうちゃんとした名前があるんだからね！』

人工知能じゃないって言われてもなあ。オレはあくまでも三次元の男子で。「あなた」はパソコン上の二次元の女の娘。二次元の女の娘がこんな自由に……。いや、でもそもそも人工知能でここまで――。

『もお、信じてないですよ！ でも、雄二様はぜったい私のモノなんだから！』